

鹿島開発関連記念碑の碑文

目次

居切浜深芝浜移転記念碑〔神栖市大野原浜松公民館敷地内〕	1
深芝浜移転記念碑〔神栖市知手仲町公民館敷地内〕	2
知手浜東団地移転記念碑〔神栖市知手浜東団地公民館〕	3
東町創立記念碑〔神栖市知手浜東町区民館敷地内〕	4
横瀬団地移転記念碑〔神栖市横瀬団地公園内〕	5
鹿島開発記念碑〔神栖市若松緑地公園内〕	5
池田亀三郎翁顕彰碑〔神栖市鹿島共同施設(株)内〕	8
掘割川記念碑〔居切西部団地内〕	9
鹿島灘頭之詩〔鹿嶋市平井〕	10
岩上二郎先生顕彰之碑〔神栖市港公園内〕	11
「黎明萬里」の碑〔鹿嶋市平井〕	12

居切浜深芝浜移転記念碑

所在：神栖市大野原浜松公民館敷地内

【碑文】

昭和三十六年茨城県知事岩上二郎は鹿島町神栖村波崎町を区域とする鹿島臨海工業地帯造成の大事業計画を発表した。その経過計画によると人口三十万の一大工業都市を建設することによりこれに即応した近代農業への体質改善をはかるいわゆる農工商全の開発を進めるということであつた。

なかでも神栖村は開発の中核として十万吨級の港湾を私たちの生活基盤である居切浜と深芝浜北部に掘り込みその臨海部に工業地帯を配置する計画であつた。三十七年八月に知事が居切浜に来られその開発は政治生命をかけた一大事業であることを真剣に説明され、港に必要な用地の提供や移転について協力するように要請された。鹿島港は三十八年に重要港湾に指定され居切浜の試験堤に更に延長工事が進められた。

一方、北防波堤は鹿島町泉川浜より、南防波堤は神栖村深芝浜より築堤工事が進められた結果、私たち部落は南北両防波堤に囲まれた形となつた。防波堤工事が進むにつれて開発組合鹿島事務所長小林芳文をはじめ職員との団体交渉、個人折衝が連日連夜続けられた。私達部落民一同も度重なる協議を開いた結果、この開発が将来地域住民に繁栄をもたらすものとして用地の提供と移転を決意したのである。

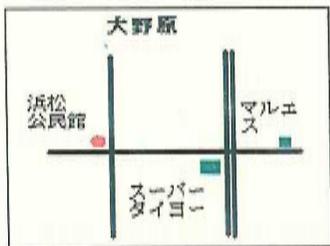
翌月から開発組合の補償調査が始められ、九月に個人ごとの移転補償額が提示されたが、更に折衝を重ね、翌四十年三月に至り移転先を大野原に定め、この地を立派に造成することを条件に全員異議なく移転承諾書に調印したのである。

六月に始められた移転は十一月に全戸が完了した。当時大野原はその名のごとく人家もない広大な野原と砂原であつた。しかし、移転者一同はこの地を永住の地とし、知事がいわゆる人間性の勝利を信じ、さらに開発組合職員の指導により決意を新たに再出発したのである。

その後鹿島港に急速に掘り込みが進められた。港は二十万吨規模に拡大され四十四年八月に世界に向つて扉を開き、企業の生産も相次いで開始されるに至つた。満々と水をたたえた中央航路に十万吨級の船舶が接岸するのを見るときつての住家はその姿をとどめずすべもないが、さきがけて移転の一石を投じた波紋をかえりみ、実に感無量のものがある。移転後すでに六カ年の歳月が経過し、この地も発展途上になり生活も安定した。これを機に移転者一同相計り賛同者の協力を得て鹿島港掘込みに協力した由来を万古に伝える為この碑を建つるものである。

昭和四十六年十月一日

撰文 作田太市



深芝浜移転記念碑

所在・神栖市知手仲町公民館敷地内

【碑文】

鹿島灘の荒波が打寄せる砂浜に続く青松の地三百五十ヘクタールに開拓の努力を秘めて百年、二百余戸の点在する神栖町深芝浜、これが昨今迄私達が永住の地としていた郷土でした。

昭和三十六年茨城県知事岩上二郎が鹿島町神栖町波崎町に寄びかけこの地域に鹿島臨海工業地帯造成の大事業計画を公表し、遠大な目標実現の為第一歩を踏み出すことになった。

この発想の根底はこの地帯の開放を目指し一千四百年前の鹿島文化の遺蹟と、徳川幕政から明治初年にわたる掘割川の歴史との対話の中からつかみとった自然への挑戦史であり、また血の出るような農民の土地を生かさうとする農工商全の思想展開の動機づけでもあるとうたい、この計画が皆の協力のもとに「人間の勝利」をつかみ取るうと知事は政治生命をかけて真剣に私たちに訴えられ、用地の提供や移転について協力されるよう要請された。

計画による私達の部落は鹿島港の臨港部に当っていました。鹿島港は昭和三十七年居切浜に試験堤の工事が進められ、昭和三十八年四月重要港湾に指定されると共に、南防波堤は神栖町深芝浜より、北防波堤は鹿島町泉川浜より、築堤工事が進められ開発の進展に伴い居切浜を第一陣として私達の部落も昭和四十年六月より深芝浜第一次移転十二戸、第二次四十四戸、第三次五十二戸と安住の地を鹿島臨海工業地帯開発組合と折衝の末、大野原・横瀬団地へとそれぞれ移転していった。残る一〇六戸は当初計画では鹿島臨海工業地帯造成事業計画からはずされていた為、鹿島開発に伴う部落の整備計画を考えていたが、開発の規模と深芝浜地先埋立の変更により昭和四十二年一月を起点として十月鹿島臨海工業地帯開発組合より移転を要請された。

この為昭和四十三年一月より度重ねて部落協議会を開き開発組合との団体交渉も連日連夜にわたる折衝を積み重ねの上に、この開発が将来地域住民の繁栄をもたらすものとして用地提供と移転を決意した。

特に昭和四十三年四月翌月から開発組合の補償調査がはじめられ、更に団体交渉個人折衝が繰り返され移転先を知手南部団地と定め昭和四十三年十二月移転契約が終了した。

昭和四十四年一月より昭和四十五年にわたり地下水の湧水、中央水路掘込みにあたる県道の切断、分校の閉鎖、更には移転先の造成地の不備等々、苦難の積み重ねを部落一丸となつて此れを乗り越え切り開きながら先祖の墓と共に移転が完了、今日の部落が誕生したのである。

今満々と水をたたえた中央航路に拾万トン級の船舶が接岸、鉄鋼企業並に石油コンビナートの第一期事業が完工し、操業をまのあたりに見るは昔日の部落はその姿を想いおこすすべもないが往時をしのいで無量の感をいだくものである。

この地を永住の地として決意を新たに再出発して四カ年、なお残された課題も多いが生活の基盤が一応整ったこの機に移転者一同相計り賛助者の協力を得て鹿島臨海工業地帯像背に協力した由来を記し後世の為にこの碑を建てるものである。

昭和四十九年五月

神栖町議会議長 吉岡 昇 撰文



知手浜東団地移転記念碑

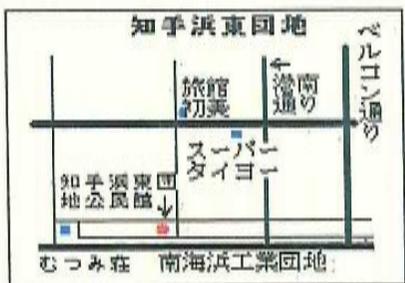
所在：・神栖市知手浜東団地公民館敷地内



【碑文】

茨城県が計画した世紀の大事業と言われる鹿島開発が発表された昭和三十四年以来、港湾掘込に工場建設用地売却へと進み、四十二年進出企業二十三社が決定、一大石油コンビナートが誕生した。
 開発の進展と共に当時奥野谷浜北組に在住する私共住民は移転を余儀なくされ、百有余年の歴史を持つ祖先伝来の地を離し、四十七年に当知手団地に将来の夢をたくして五十余戸が集団移転した。
 願わくはこの碑を部落の礎としてその発展を願うものである。題字は当時の茨城県知事岩上二郎氏の揮毫によるものである。

昭和五十二年十月吉日



東町創立記念碑

所在・・・神栖市知手東町区民館敷地内

【碑文】

東洋々たる太平洋、西坂東太郎の巨流に抱かれた砂丘に松原つづく鹿島南部に、臨海工業地帯造成の発想をもたらししたのは、当時の茨城県知事若上二郎であった。時に昭和三十六年五月稀なる風土と濃やかな人情の中になじみ親しみ来った父祖伝来の揺籃の地奥野谷浜も東部コンビナート予定地内に包含され、移転の対象になる。

この有史以来の大変革に際会して意思決定に迫られた住民は衆議を集め熟慮を重ねることを幾十度、想いを世界の進運に照らし、後進性より脱却することによって、より大いなる飛躍と幸福とを招来することを確認、これが計画に賛同協力、新天地を知手団地と定めるや昭和四十二年より逐次移転を続行、安住地の形成に着手した。

新たなる立地基盤の上に求めたる職種経営、基盤造りから浮かび上がる文化都市建設への意欲は年毎に燃えたかまり繁栄への精進と忍耐の歳月が流れ、昭和四十五年に至って東町の誕生を見るまでに進展した。

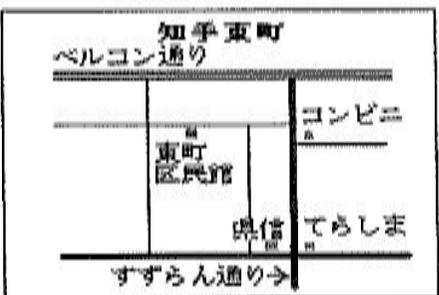
もとより東町は奥野谷よりの移転者と鹿島開発による他郷よりの転入者と地元民の融合一体化の上に成り立ちこれが開花結実へと確実に進めて来た。

かくして星霜十年を閲した現在、神栖町一を誇る人口密度と整備された環境を持つ市街地として登場した。これみな粒々辛苦町内住民の一致団結のもと、共存共栄理想郷建設へ向かつての努力の結晶にほかならない。

ここに創立十周年を向えるに当り、町民各位の総意にはかり碑を建てこれを永く世に伝えるものなり。

昭和五十四年十二月吉日

撰文 柴田政助



横瀬団地移転記念碑

所在：神栖市横瀬団地公園敷地内

【碑文】

抑々旧深芝浜並に旧池向は天保の末期弘化の始にかけて開拓され、ここに吉百式拾有余年を経た。この間地場産業としては漁業を主力とせるも逐次農業へと進み、幾多の困難を克服し、養蚕、蔬菜、園芸、葉タバコ、甘藷等の大栽培へと進み、其の銘柄は日本有数の産地として発展した。

偶偶時の県知事岩上二郎は昭和三十六年鹿島臨海工業地帯の造成と云ふ一大構想を発表し、鹿島町神栖村波崎町の住民に対し、其の用地の提供を求めて来た。私達は之に対し幾十度に及び話し合いの中から知事の云う農工商全の思想に賛同し、要望をいれ四割の土地を提供し、昭和四十二年同四十二年に此地に移転し十年の歲月は過ぎた。ここに部落一同発起し移転の碑を建立し変遷を永へ伝える。



鹿島開発記念碑

所在：神栖市若松緑地公園内

【碑文】

鹿島地帯は千古から滔々と流れる利根川、黒潮おどる太平洋、満々と水をたたえた北浦にはさまれ、茨城県下でも最も温暖な地であり、ここにおおらかな人情が育まれていたのである。

鹿島開発以前を思い起すと、この地の産業は農業であった。農家は米、麦、甘藷、落花生などによって生計を立てていた。水に囲まれ、交通は船が頼りであったため、不便の上もなかった。こうしたことから、茨城県の中でも特に開発が遅れ「陸の孤島」といわれたのである。

しかし土地は平坦で広いうえに地盤が硬く、工業用地としては適していた。また霞ヶ浦、北浦に近く水資源が豊富であること、さらに首都東京に近いなど、工業立地条件に恵まれた地帯でもあった。

抑々鹿島開発はこの地帯のこのような特性に着目し、人間としての真の幸せの到来を期待し、農工商全を理念として始められたものである。その対象は鹿島町、神栖村（のちに神栖町）、波崎町の二町一村にわたった。地元にはじめて開発の概要が示されたのは、昭和三十六年四月である。同年九月にはマスタープランである鹿島臨海工業地帯造成計画が発表された。掘り込み式港湾の築造を中心に三千二百ヘクタールに及ぶ工業用地を確保し、大構想は現実のものとなったのである。

しかしながら、開発の推進に当たっては、用地の取得をはじめ、移転対策、農業振興、生活環境整備など難問が山積みしていた。これも多くの方々の協力により次々に克服され、現在もその努力がなされつつあることは、まことに喜ばしい限りである。

用地の取得は鹿島臨海工業地帯開発組合鹿島事務所により、昭和三十九年二月から、所有地の四〇％を提供、六〇％を代替地として配分される鹿島独特の「六・四方式」といわれるもので行われた。茨城県は用地提供によって耕作面積の減少する農業対策として、施設園芸を奨励し補助金を出した。これをきっかけに波崎町ではピーマンが昭和四十五年に国の野菜産地指定を受け、全国有数の産地に数えられるなど施設園芸がきわめて盛んになった。

波崎町の中で用地取得の対象となった、いわば鹿島開発揺籃の郷、若松地区の移り変わりをみると、近世後期には太田新田、須田新田、柳川新田の三村に分かれていた。明治二十三年四月市制町村制の実施により若松村になり、昭和三十一年二月には現在の神栖町に編入された一部を除き、波崎町と合併し現在に至っている。

光陰矢の如し、地元には鹿島開発の概要が示されてから早くも二十六年の歳月が流れた。この間二十万トン級の船舶が入り出る鹿島港を中核として、四地区に七十三、うち波崎地区には二十二の企業が進出した。全体の出荷額は年間一兆七千億円、茨城県における出荷額の二二％に達している。こうしてかつては生産性の低い耕地と松林が大部分であったこの地帯は、いまでは世界を市場とする石油化学・鉄鋼・先端技術産業等の生産・研究の場と共存することになった。この急激な変貌はまさに他に類例を見ない驚異的な事実である。

私どもは鹿島開発の理念に賛同し、先祖伝来の貴重な土地を提供した。そして昭和四十一年十一月に鹿島臨海工業地帯開発用地提供者同盟を結成した。それ以来今日まで盟友相携え鹿島臨海工業地帯の進展に伴い発生した種々の事態に対応し、盟友の経済的地位の向上に努力してきた。昭和五十九年七月三十一日に鹿島臨海工業地帯開発組合が解散となり、鹿島が新しい時代を迎えるに当り一人ひとりの温かい理解と協力に基づいたもので

あり、地域開発の礎石となった誇りと、日本では二十世紀最後の巨大開発といわれる鹿島開発の偉業を永久に後世に伝えるために、盟友の総意により、この開発記念碑の建立を決議した。

願わくば、鹿島開発が国内外の経済発展に寄与し、合わせて盟友の世代にわたる幸せ、この地帯と進出企業の明日への大いなる躍進をもたらすことを深く念ずるものである。

昭和六十二年五月吉日

波崎町鹿島臨海工業地帯開発用地提供者同盟

委員長 高島喜蔵撰文

【波崎町における鹿島開発の概要】

行政区域面積 68,77平方キロメートル
 開発対象面積 1,000ヘクタール
 提供面積 956ヘクタール
 提供者数 491人
 買収の主体 鹿島臨海工業地帯開発組合
 買収方式 鹿島方式(6・4方式)
 買収開始時期 昭和39年2月1日
 平均買収単価 17万円(反当)
 移転家屋数 95件
 生活環境施設整備資金補助金 総額128億6千万円
 波崎町への補助金 37億300万円



池田亀三郎翁顕彰碑

所在：東部コンビナート・鹿島共同施設(株敷地内)

【碑文】

この鹿島の大地にかけた池田さんの大きな夢はいま着実に現実化しつつある。

広い視野とすぐれた洞察力を持った池田さん、緻密な企画力果敢な行動力をもつ仕事の鬼池田さん、この国家的大人物池田さんとのめぐり合いは私にとってまた鹿島にとってこの上ない幸せであった。

私が鹿島開発を思い立った昭和三十五年、池田さんもまた奥さんとともに鹿島に泊まり、この砂丘を調査しておられた。偶然の一致というより、偶然即必然というべきか、見えざる神の配慮をただおそれる。

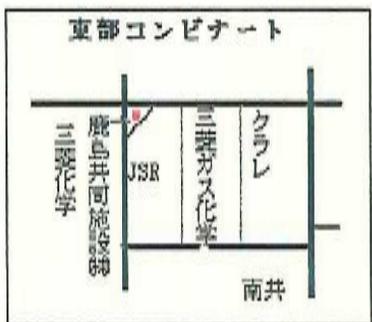
私の池田さんの人となりによせる信頼は、日ごとに深まっていった。この人なら必ずやる、私の夢は、この人なら託しうる、私は鹿島開発の計画をこの人に訴え続けた。「三菱の赤じゅうたんも私の靴でだいぶすりへったでしょう」私の意見を受け入れてくださった池田さんと涙の握手をしたあのときの私のよるこびを私は修正忘れることはできない。

鹿島は、その創立の過程において、その完成された姿において、世界に冠たるものであると信ずる。その鹿島の開発を進めるにあたって、世界を相手に堂々とやっつてのけたおそるべきファイトマン、池田さんの業績は世界史の中に長く記録されなければならない。

そして、「人間性の勝利」の金字塔は永久に鹿島の大地とともに生き続けていくことである。

池田亀三郎翁の米寿によせて

題字並撰文 茨城県知事 岩上 二郎



掘割川記念碑

所在： 神栖市居切西部団地内

【碑文】

鹿島臨海工業地帯の心臓部ともいえる鹿島港。鹿島灘から陸地内部に向かって掘り込まれた巨大港は、幕末から明治時代にかけて治水と新田開発の為に計画開削された「掘割川」を一部利用してつくられている。掘割川は北浦や霞ヶ浦を直接、鹿島灘へ流す水路として計画されたものである。

計画は明治二年（一八六九）現在の福島県三春町出身の浪人、中館広之助の熱意と努力で着工に至るが、難航を極め明治四年（一八七一）七月に完成し、延長五・四五キロメートルの掘割が通じた。

その後明治三十九年、四十三年の大洪水の時には、海岸部に近いしめきりを開いて、あふれる水を海に流し、地域を水害から救っている。

また大正から昭和へと歳月は移っていったが、掘割川はいつも清らかな水をたたえて、どのような干ばつにも絶えることなく豊かな水を流して、地域の田園を潤し、地元周辺地域経済社会を支える水運機能として、重要な役割をはたしてきた。

この事業が鹿島地方にもたらした影響は大きく、現代の鹿島開発に匹敵する意義があるとされている。

この記念碑は先人たちの労苦の末に築き、豊かな恵みを与え続けてくれた掘割川の存在を世に残す為に建立したものである。



鹿島灘頭之詩

所在：鹿嶋市平井（鹿島宇宙通信センター敷地脇）

【詩】

艱苦辛酸幾星霜
双鬢已白功未成
波高鹿島灘頭月
唯祈鹿南百年栄

【文】

この詩は昭和三十七年鹿島臨海工業地帯造成のため開設された鹿島臨海工業地帯開発組合鹿島事務所の初代所長であった小林芳文の作によるものである。

開発組合においては昭和三十七年以来全職員一丸となって用地取得のため日夜辛酸を重ねてきたが、用地買収は年々困難を極め厚い壁に突き当たりこの状態を憂慮した氏は昭和四十一年全職員を鼓舞激励するため、自らこの詩を吟じて決意を示し、全職員が不とう不屈の精神を持ってまい進するよう一大奮起を促したものである。

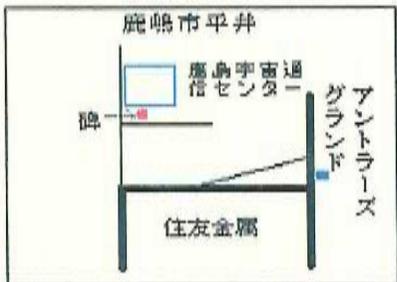
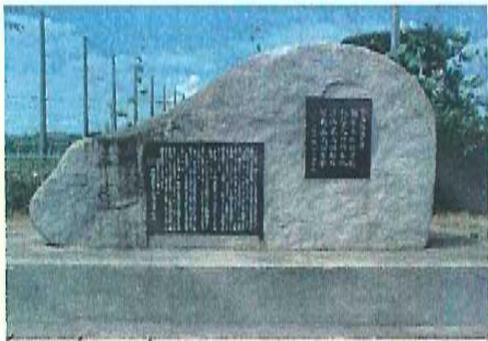
おもうにこの詩は全職員の汗と涙の中から生れた絶唱にほかならない。このことはやがて心ある人々の共感を呼び買収の促進に寄与するところ少なからざるものがあつたと伝えられている。

今や鹿島臨海工業地帯開発組合は設立依頼二十有余年におよび、大方の使命を終え栄光の歴史が幕を閉ざし、鹿島開発の一層の発展を求めて新たな局面を迎えようとしている。

このときに当り、地域の有志相諮り開発の土台ともいふべき用地確保のため多年にわたり血のにじむ努力を傾けられた小林芳文氏をはじめ歴代職員諸氏の労苦をしのびその心意気を永く校正に伝えるためこの詩碑を建立するものである。

昭和五十九年八月一日

茨城県知事 竹内 藤男 撰文



岩上二郎先生顕彰之碑

所在：神栖町港公園内

【略歴】

大正2年（1913）瓜連町に生まれる
平成元年（1989）72歳没す
京大法卒
瓜連町長2期
茨城県知事4期
参議院議員3期
昭和62年（1987）勲一等に叙せらる
平成元年（1989）従3位に叙せらる

【碑文】

岩上先生は昭和34年4月茨城県知事就任以来16年余、県勢進展に心を砕かれ、とりわけ鹿島開発事業の完成に精魂を傾けられた。

先生は50年に知事を退任されたがその辞任の賦に

筋に燃やし来る哲理の灯

未だ成らず仁愛に発す農工両全の道

と謳われた。

人間性の勝利を確信し、世界に冠たる鹿島港及び工業地帯の建設を進めて、その仁愛の精神をあまねくされ、今日の鹿島を築いて、そこに住む人々に人間の尊厳を高らかに教え示した。

先生の哲理の灯はあかあかと燃えつづけ、開発の偉業と共に深くわれわれと共にある。

一粒の麦として大地に夢を呼び、地の塩として苦渋に耐え、弛むことのない琴線の高らかに謳歌した農工両全の道をわれわれは先生と歩まん。

元神栖町長 馬場佳二郎撰文

平成2年9月28日建立

岩上二郎顕彰之碑建立の会



黎 明 萬 理

所在：鹿島宇宙通信センター敷地脇

【碑文】

遙かなる時を想うのではない。いまこの大地に創造されてゆく金字塔のその鼓動に、努力の日々を辿るのである。そこには人間性の尊厳から出発した溢れる夢があった。

そしてわれわれは35年の偉大さに感動するのである。

大地は拓かれ海は世界を結び豊かさを求めての躍動がある。更なる明日の鹿島の発展を願う槌音がある。鹿島を愛しここに生きてきたわれら、いま新たな出発点としてここに記録し、鹿島千載の栄を希うものである。

題字：茨城県知事 橋本 昌

頌徳：橋本登美三郎先生 岩上二郎先生

撰文：鹿島親交会会長 小林芳文

平成7年7月20日(1995年)建立

【鹿島臨海工業地帯開発組合35年の歩み】

鹿島臨海工業地帯の開発は昭和35年4月(1960年)茨城県が立案し事業が開始された。

昭和37年4月	国が鹿島港事業費5億円決定
昭和37年4月	鹿島臨海工業地帯開発組合が用地 買収を開始
昭和38年4月	鹿島港が重要港湾に指定
昭和43年12月	住友金属工業鹿島製鉄所創業開始
昭和45年4月	鹿島石油鹿島製油所、三菱油化 鹿島事業所創業開始

開港後20有余年、この地域は国鉄鹿島線、東関東自動車道、水郷有料道路の開通、港公園、上下水道、工業用水の供用開始等着々と公共設備の整備が行われた。

平成5年5月には鹿島町に県営サッカー場が完成し、同年7月に鹿島アントラーズがJリーグにおいて優勝し全国に鹿島の名を遍くした。

平成元年7月鹿島港開港20周年記念の行事が行われ平成5年の入港船舶は1万数千隻に及び世界に開かれた国際港となった。

この地域に50数社の大企業が立地し日本における有数の工業地域特別地域である。用地提供者の協力、先輩諸氏の築いた歴史的大事業の成果を礎として、今日の繁栄があることを決して忘れることなく後世に語り継がなければならない。

21世紀には沖合人工島の建設を始め、多くの地域振興プロジェクトが進展するものと思われる。明日の鹿島の発展を祈念して「海の記念日」の今日鹿島臨海工業地帯開発組合35周年の節目に当り、鹿島親交会、「鹿島灘頭之詩碑」保存会有志によって、ここに記念碑を建立す。

平成十年一月吉日

平成十四年四月
作成
北島和義

